

# 山口和雄の網漁業研究にみる アチック・ミュージアム時代の水産史研究の位置づけ

Fisheries History Research of Kazuo Yamaguchi on Net Fisheries Research in the Attic Museum

磯本 宏紀

ISOMOTO Hironori

## 要 旨

山口和雄（1907-2000）のアチック・ミュージアム入所は昭和10年4月だった。東京帝国大学の恩師土屋喬雄からの紹介によるものだった。以降昭和21年9月に日本常民文化研究所（昭和17年改称）を退所するまでの11年余り在籍した。この時期は、山口にとっては20代後半から30代後半にあたり、若手研究者としてその後の研究を左右する重要な時間を送ったと言える。

この間の山口のアチック・ミュージアムにおける現地調査は、昭和10年から12年の3年間を中心に行われ、内房漁業史調査、隠岐調査（桜田勝徳、岩倉市郎と同行）、島根県美保関、広島県三津町、愛媛県大三島で調査、九十九里調査（地曳網漁業調査）、富山湾灘浦（氷見）（台網漁業史調査）、瀬戸内海巡訪（渋沢らと同行）、志摩和具村調査（海女調査）（桜田勝徳、岩倉市郎、宮本馨太郎、小川徹らと同行）と続いた。この時期を山口のアチック・ミュージアム前半期とした。

また、このときの調査成果は、『アチック・ミュージアムノート』、『アチック・ミュージアム彙報』等にまとめられた。アチック・ミュージアムの中でもトップクラスの発表数であり、アチック・ミュージアム水産史研究の主力となって活動していた。ただ、その後昭和13年の渋沢栄一伝記史料編纂所への異動、兼務状態となり、水産史研究から若干距離を置くようになる。また、戦局の悪化により、現地調査もままならない状況に陥っていった。この時期以降をアチック・ミュージアム時代の後半期と本稿では位置づける。

アチック・ミュージアム時代の前半期（昭和13年の澁澤栄一伝記史料編纂所以前）は現地調査を中心とした一次資料の調査・分析を行い、後半期は現地調査が十分行えない中で、漁業史の体系化に向けた構想を進めた。こうした作業が、戦後に刊行される『日本漁業史』『日本水産史』『明治前日本漁業技術史』等の大きな成果となって実を結んだ。一方、山口和雄自身は、戦後は水産史研究にとどまらず、広く経済史研究に邁進し、同分野の確立と発展に貢献した。

【キーワード】 山口和雄、網漁業研究、アチック・ミュージアム

## 1. はじめに

本稿で焦点をあてる山口和雄（1907-2000）は、社会経済史、経営史の研究者である。アチック・ミュージアムには昭和10（1935）年4月から昭和21（1946）年9月までの間所属していた。山口の入所のきっかけは、東京帝国大学教授で恩師の土屋喬雄から懇意にしていた渋沢敬三への紹介によるものであった。この時期は山口にとっては28歳から39歳という時期であり、研究者としては若い活力のある時期をアチック・ミュージアムで過ごしたと言えよう。その山口は、当時のアチック・ミュージアムの水産史研究においては中心的な役割を担うことになった。

ただ、山口和雄の研究者人生全体においては、水産史関係の著作物は、アチック・ミュージアム在籍時代と、北海道大学在籍時代（昭和22～32年・39～50歳）の時期にほぼ限定される。山口和雄の水産史研究は、比較的若い時期に取り組んだ実証的研究であると彼の研究業績の中で位置づけることができる。

さて、本稿では、アチック・ミュージアム時代の山口和雄の調査研究を整理して山口自身の問題意識を明らかにするとともに、そうした研究成果が後の研究にどのように結びついていったのかについて検討することにした。

以降、本稿では次のような構成をとる。第2章「アチック・ミュージアム時代の山口和雄の調査研究」ではアチック・ミュージアム時代の山口和雄の調査研究について概観し、第3章「水産史研究における山口和雄の視点」では、水産史研究における視点を各著作物及び調査歴等から探り、第4章「アチック・ミュージアム時代の水産史研究からの展開」では、山口和雄がアチック・ミュージアム時代に行った調査研究が、後の研究の中にどのような影響を与えていたのか、どのような形で後の研究に生きているのかについて検討する。

## 2. アチック・ミュージアム時代の山口和雄の調査研究

アチック・ミュージアム時代の山口和雄の置かれた環境について、後に山口自身が次のように回顧している。

「会議もしなくていいし、講義もしないし、学校の行政事務みたいなことはなにもない。どんな経営のやりくりでやっているかは全然頭がないし、というような状態でした。ただ研究をし、それをまとめていたわけです。ですから、私の生涯のうちで、最もよく勉強のできた時代だったといえましょう。」（山口和雄先生古希記念誌刊行会編 1978：85）

アチック・ミュージアムにおける研究環境が良く、専念できる環境、立場であったこと、また、その年代をアチック・ミュージアムで過ごしたことが研究者としても良かったということがわかる。山口自身がその後経験した複数の国立（北海道大学、東京大学）、私立の大学（明治大学、創価大学）に比べても、ある意味では恵まれた研究環境であったとも言えよう。ただ、実際の待遇については、以下のような発言もある。

「わずかですが月給をもらって、もちろん旅費などは全部出してもらっていました。（中略）あまりいいとは思えませんね。だけどとにかく好きな勉強をして、それを印刷して書物にってもらっていたの

です。」(山口和雄先生古希記念誌刊行会編 1978:83~84)

いずれにしても、20代後半から30代の山口和雄にとって、アチック・ミュージアムに籍を置いたことは、優れた研究環境があり良かったと評価して良いだろう。

アチック・ミュージアムへ入所当時、山口は精力的に現地調査を行っていた。以下に時系列で列記する。

①内房漁業調査

昭和10(1935)年7月6日~14日

②隠岐調査での糸満漁民等調査(桜田勝徳、岩倉市郎と同行)

昭和10(1935)年8月10日~27日

③九十九里調査での地曳網漁調査

昭和11(1936)年2月4日~11日

④富山湾の台網漁業史調査

昭和11(1936)年9月16日から1週間程度

⑤瀬戸内海島嶼巡訪(渋沢敬三らと同行)

昭和12(1937)年5月14日~21日

⑥志摩・和具村(桜田勝徳、岩倉市郎、宮本馨太郎、小川徹と同行)での海女調査

昭和12(1937)年7月1日~13日

アチック・ミュージアムに入所してすぐのわずか3年間に、あわせて6カ所の現地調査を経験している。

①内房では、漁法、流通、加工等漁業全般にかかわる調査をし、現千葉県鋸南町等で聞き書きをした。自ら調査地を選定して調査を行った。

②隠岐では、沖縄糸満から隠岐に出稼ぎにくる追い込み漁の漁民を対象とした聞き書き中心の調査を、渋沢の勧めにより桜田勝徳、岩倉市郎とともにしている。

③九十九里では現千葉県南房総市から旭市にかけての外房地域を踏査し、網主の経営帳簿等の資料を獲得している。

④次いで行った富山湾の定置網である台網漁業調査では、漁法や漁場管理について、聞き書きと漁場図等の資料から調査を行った。

⑤瀬戸内海島嶼巡訪は渋沢の発案により、渋沢敬三ら十数名が同行して瀬戸内の島嶼を巡訪した。

⑥その直後に志摩の和具村へ桜田勝徳、岩倉市郎、宮本馨太郎、小川徹と同行し、村役場文書を中心に調査を行った。

こうした現地調査により、アチック・ミュージアムからの出版物が次々に出版されていった。列記すると次のようになる。

◎昭和10(1935)年10月 アチック・ミュージアムノート2『明治前期を中心とする内房北部の漁業と漁村経済〔見聞記〕』上(①内房漁業調査の成果)

◎昭和10(1935)年12月 アチック・ミュージアムノート4『隠岐島前漁村探訪記隠岐調査報

- 告 1』(桜田勝徳と共著) (②隠岐調査での糸満漁民等調査の成果)
- ◎昭和 11 (1936) 年 1 月 アチック・ミュージアムノート 5 『美保関・広島三津・伊予大島漁村探訪記』(桜田勝徳と共著) (②隠岐調査での糸満漁民等調査の帰路に寄った調査地の小報告)
- ◎昭和 11 (1936) 年 3 月 アチック・ミュージアムノート 2 『明治前期を中心とする内房北部の漁業と漁村経済〔見聞記〕』下 (①内房漁業調査の成果)
- ◎昭和 12 (1937) 年 7 月 アチック・ミュージアム彙報 12 『九十九里旧地曳網漁業』(③九十九里調査での地曳網漁調査の成果)
- ◎昭和 14 (1939) 年 12 月 アチック・ミュージアム彙報 31 『近世灘浦台網漁業史』(④富山湾の台網漁業史調査の成果)
- ◎昭和 15 (1940) 年 9 月 アチック・ミュージアムノート 16 『瀬戸内海島嶼巡訪日記』(分担執筆) (⑤瀬戸内海島嶼巡訪の成果)
- ◎昭和 16 (1941) 年 6 月 アチック・ミュージアムノート 19 『澁澤漁業史研究室報告第一輯』に「近世豆州内浦大網漁業に於ける網度について」を寄稿
- ◎昭和 17 (1942) 年 8 月 アチック・ミュージアムノート 23 『澁澤水産史研究室報告第二輯』に「明治二十四年前後の我國漁業」を寄稿

なお、山口和雄は昭和 13 (1938) 年 2 月以降、出征する太田慶一に代わり、渋沢栄一伝記資料編纂所に異動になった。編纂事業は龍門社による事業で、昭和 11 (1936) 年から恩師土屋喬雄が同資料編纂所の主任を務めていた。当初は金融と商業会議所その他の経済団体について担当した。このアチック・ミュージアムからの配置替えにより、山口は自身の意志にかかわらず現地調査をとまなう水産史研究から距離を置かざるを得ない状況になった。

昭和 14 (1939) 年に入るとアチック・ミュージアムと伝記資料編纂所との勤務が半々になり、漁業史研究に再び携わるようになった。昭和 15 年『豆州内浦漁民史料』全 5 冊の印刷が終わったのをきっかけに、昭和 16 (1941) 年 6 月にはアチック・ミュージアムノート 19 として『豆州内浦漁民史料』や内浦の漁業史研究に取り組み、『澁澤漁業史研究室報告第一輯』を刊行した。山口自身は漁業経営を中心にして「近世豆州内浦大網漁業に於ける網度について」を寄稿している。次いで、翌年の昭和 17 (1942) 年には全体的な漁業史を構想した論文「明治二十四年前後の我國漁業」を『澁澤漁業史研究室報告第二輯』に掲載した。

その当時、ちょうどアメリカ等との戦争が始まり、これまでのように漁村での聞き取り調査や古文書調査が事実上困難になってきた時期であった。一方で、帝国学士院(現日本学士院)の紀元 2600 年事業として明治以前の日本科学史の編さんが計画されていた。そのうちの 1 冊漁業技術史について渋沢が受け持ち、それをアチック・ミュージアムで分担して取り組むことになった。次のような分担で計画された。

釣漁業：渋沢敬三(補助として宮本常一)

網漁業：山口和雄

捕鯨史：伊豆川浅吉

魚肥：戸谷敏之

製塩：楫西光速

漁船：桜田勝徳

氷上漁業：竹内利美

昭和 10 年代後半、戦争が激化する中で、漁村での現地調査から漁業技術史研究へとシフトしていった。そうした作業と並行して、漁獲物から見た漁業史の構想も並行して進めていた。だが、これらの成果が日の目を見たのは、戦後になってからだった。

### 3. 水産史研究における山口和雄の視点

前章で確認した山口和雄の現地調査と、その視点、関心の連動性について、明快である。時系列で列記すると次のように推移していったことを確認できる。

#### ◎内房漁業調査（昭和 10 年）

現地を歩き、丹念に内房の漁村の実態を見て、聞き書きを行う。

#### ◎隠岐調査（桜田勝徳、岩倉市郎と同行）（昭和 10 年）

渋沢からの勧めにより、隠岐に季節的出稼ぎを行っていた糸満漁民の実態調査を行い、漁具漁法の発達史について、追い込み漁の漁具と鯛縛網漁との網構造の関係性について、具体的な事例から構想する。

#### ◎九十九里調査（昭和 11 年）

地曳網漁業経営史料との出会いによる経営実態把握。網漁業が入会漁場で行われる地域的特徴の把握。

#### ◎富山湾の台網漁業史調査（昭和 12 年）

台網（定置網）漁業経営史料による経営実態把握。漁場図調査により、定置網と漁場との関わりについて関心を寄せ、入会漁場である九十九里との漁業経営と漁場管理を比較。

現地調査を行い、そこで着目した資料や視点が明確である。現場で実態を明らかにする実証研究を重視した。渋沢敬三の指導のもと、理論構築より実際の史料を読み、現地調査を行い、まずはその事例、事実を明らかにしようとするスタイルがアチック・ミュージアムに一貫してあったのであるが、それ以外には、アチック入所以前からの山口自身の研究姿勢や考え方も背景にあったようである。後に山口の研究姿勢は、アチック・ミュージアムを出てからもなお、「足で歩いて」オリジナルな史料を徹底的に追究していくという研究態度であると評価されている（大塚ら 1968）。

また、昭和 8～9 年頃の土屋喬雄・服部之総論争（マニュファクチュア論争）を、山口自身が東京大学大学院生時代に目の当たりにするにあたり、

「（議論の）もとになる実体の解明が不十分じゃないかと感じていました。（中略）もう少しすべてに余裕があって、その時代に各地のことを基本史料で地道に調べることが必要ではないか、結論はそれからでもおそくないではないかという感じをもっていました。そういう気持ちがあったのが、やがて渋沢さんの所に入ってから、漁業をやる場合に現われたのではないかと、今考えてみると思うんですけれど。はっきり意識していたとは必ずしもいえませんが、経営帳簿ぐらいは分析してみなければ駄目じゃないかと考えていたようです。」（山口和雄先生古希記念誌刊行会編 1978）

と後に自己分析している。

ところで、山口和雄は歴史学（経済史）を専門とする研究者であったが、先述のとおり、アチック・ミュージアム時代には民俗学、地理学を専門とする研究者とも現地調査に同行した。双方に対して少なからず影響があり、触発された面はあったものと考えられる。あるいは、推察するしか

いが渋沢から何らかの個別の指示、指導があったのかもしれない。

そうしたことを裏付けるものとして、山口和雄が現地調査の中で収集したと考えられる民具が現存し、現在国立民族学博物館に所蔵される。収集年代、収集場所と収集者を照合すると、アチック・ミュージアム時代の調査で収集していることがわかる資料である。昭和10(1935)年7月の内房漁業調査(単独)、昭和10(1935)年8月の隠岐調査(桜田勝徳・岩倉市郎と同行)、昭和11(1936)年2月の九十九里調査(単独)、昭和11(1936)年9月の富山湾台網漁業史調査(単独)のときの成果物である。

このとき収集した資料は、漁業史調査と直接関わりのない籠、箕、蓑、こね鉢などの民具が多く、共同研究で国立民族学博物館所蔵資料を確認した範囲では漁業関係用具は多くない。つまり、山口による収集民具から山口自身の漁業史研究を再検証する材料とはなりにくい。ただ、現富山県氷見市、すなわち昭和11(1936)年9月の富山湾台網調査時に収集したと考えられる藁網の一部については例外である。藁を材料とした使い捨ての定置網として編まれる台網の一部サンプルとして、現地調査時に収集したのと考えられるものである。聞き書き調査、観察調査、文書調査などの調査の中でモノ資料である民具を自身の目的に応じて収集していたとも言える。

いずれにしても、この点については詳細な照合作業が必要となる。ここではまずは課題として提示するにとどめたい。

#### 4. アチック・ミュージアム時代の水産史研究からの展開

山口和雄が、昭和10(1935)年にアチック・ミュージアムに入り、核となるメンバーのひとりとして、各地で現地調査を行い、それを逐次報告していたことは先述のとおりである。その報告書自体山口和雄の水産史研究の成果と評することができるが、そうした実証研究の上でどのような理論や枠組みを見いだしていったのかについても指摘しておきたい。

若き日の山口による実証研究がどこに行き着いたのか。実証研究にもとづき、漁業史の類型、体系化を構想していた。とくに技術的側面に着目し、漁具漁法とくに網漁業の発展論的分類を目指していたと見ることができる。

古典的な網技術の分類方法として、明治期に編纂された『日本水産捕採誌』による成果がある。明治19(1886)年に農商務省により出されたもので、最初の漁具漁法の体系的分類であると言える。この中で網漁業について、「曳網類」「繰網類」「旋網類」「敷網類」「刺網類」「建網類」「掩網」「抄網類」の八分類を提示している。網の使用法あるいは機能性を指標とした分類であり、それ以後の分類の標準的な基準となり、検討対象となった。

これに対し、山口和雄はアチック・ミュージアムでの水産史研究にもとづいて次のような体系、分類を発表していった。

◎昭和17(1942)年「明治二十四年前後の我國漁業」、日本常民文化研究所ノート23『渋沢水産史研究室報告』第二輯 日本常民文化研究所

ここでは漁法による分類と対象漁獲物による分類を提示し、網そのものの機能性ではない分類指標の検討が可能であることを示した。論題中の「明治二十四年前後」という時期設定は、明らかに『日本水産捕採誌』と同時代を意識したものであった。

◎昭和22(1947)年『日本漁業史』生活社

昭和17年時の論文「明治二十四年前後の我國漁業」を継承し、漁獲対象ごとの漁業発達史

的分類による網漁業の分類を行った。

◎昭和 23 (1948) 年『日本漁業経済史』北隆館

アチック・ミュージアム時代の初期に行った現地調査にもとづき、調査地ごとにそれぞれの網漁業の形態について書いた。九十九里浜の曳網漁業、富山湾の台網漁業、豆州内浦の建切網、内房及び隠岐の漁業の章をそれぞれ立てて執筆している。本書は、アチック・ミュージアム時代の調査成果をそのまま反映したものであると言える。この時期はすでに北海道大学に赴任していた時期であり、それまでの実証研究の成果についてまとめたものである。

◎昭和 32 (1957) 年『日本水産史』角川書店（日本常民文化研究所編、第2編「網漁業技術史」を分担）

ここでは、網漁業発達史的分類および近代の網漁法への展開について論じている。なお、魚種別の網漁業分類は用いず、「曳網」「敷網」「刺網」「旋網」「建網」といった従来の機能分類にもとづいて執筆している。もともとは戦前に構想されたものであるがそれが未完に終わり、戦後になって改めて角川書店から出版されたものである。山口和雄が「網漁業」を分担執筆したほか、水産資源論（羽原又吉）、釣漁の技術的展開（宮本常一）、捕鯨（伊豆川浅吉）、築漁（祝宮静）、水上漁業（竹内利美）、鵜飼漁業（竹内利美）、水産養殖（伊豆川浅吉）、東京湾の海藻をめぐって（桜田勝徳）、水産製造（伊豆川浅吉）、製塩（楫西光速）、古文書と魚名の漢字（藤木喜久馬）、水産史料（宇野脩平）といった体制で書かれている。

◎昭和 34 (1959) 年：『明治前日本漁業技術史』日本学士院

戦前からの渋沢敬三を中心としてアチック・ミュージアムで検討していた構想が実を結んだもので、山口は『日本水産史』同様に「網漁業」を分担執筆している。しかし、一方で戦前の執筆予定者の内、「製塩」（楫西光速）、「漁船」（桜田勝徳）、「鰹漁」（伊豆川浅吉）、「魚肥」（戸谷敏之）等は諸々の事情により掲載されることはなかった。

山口はこのなかで、機能分類だけではなく、網漁具の発達史に着目した網具の発達史的分類のメルクマールを提示する。近代漁法としての鯛縛網漁法と糸満漁民の追い込み漁法を比較して、漁具の水中自立性の特徴について考察する。漁具（網）の水中での自立性をメルクマールとし、自立性の高いものが発達した段階だとする網漁具の段階的発達を構想した。その背景には、アチック・ミュージアム時代の桜田勝徳、岩倉市郎とともに昭和 10 (1935) 年に隠岐調査時に行った糸満漁民の追い込み漁の観察調査、聞き取り調査が基礎にあったと考えられる。

以上を整理すると、山口和雄の水産史研究の到達点は、とくに網漁業の発展論的分類を提示したことにある。その背景にあったものとして、2点を指摘できる。第1に『資本論』や、農業、工業の発展段階理論等、当時の時勢的思想的背景にヒントを得て漁業におけるフレームワークなり理論構築に挑んでいた点である。そして、第2にその議論の土台となった実証研究としてアチック・ミュージアム時代の漁業の現地での実態調査の経験があった点である。具体的には、富山湾の台網漁業、糸満漁民の追い込み漁、九十九里地曳網漁の調査等、直接的な影響を見いだすことができる。

一方で、山口は戦後に漁業史の研究再開とその研究環境について語った言葉の中で、アチック・ミュージアム時代のわずかな現地調査のみによって理論構築を行ったことについて、戦時下の条件の中でやむを得なかったこととして悔いている。また、山口和雄が、戦後に復員して研究生活に復帰した頃のこと、戦争と自身の水産史（漁業史）研究との関係性について後に語った言葉があるので以下に引用する。

「漁業史をやるという人は非常に少ないですからね。私などは条件が揃っていたら、きっといつまでもやっていたかもしれませんが。けれども幸か不幸か、戦争があったので、結局は中断してしまったのですけど……」(山口和雄先生古希記念誌刊行会編 1978)

山口自身が自身の研究生活の中での漁業史研究(もしくは水産史研究)を位置づけている。昭和10年代後半の戦時下における現地調査への障壁、自身や同僚研究員の出征、戦後の日本常民文化研究所の解散、自身の北海道大学への赴任といった諸々の条件の中で、山口は水産史研究から一步距離を置かざるを得なくなったと想像できる。結果的に、そうした水産史研究の下地をもつ、社会経済史家、経営史家の山口和雄を生むことになった。

戦後の山口は水産史(漁業史)に限定することなく、広く社会経済史研究、経営史研究を展開していくことになった。逆に言えば、山口和雄の水産史研究は、アチック・ミュージアム時代の成果によるものがほとんどで、その後に本格的に個別研究を進展させることはなかったとも言える。

## 5. おわりに

本稿において、山口和雄の網漁業研究にみるアチック・ミュージアム時代の水産史研究の位置づけを試みた。山口和雄自身がアチック・ミュージアムに所属していたことにより、水産史研究に専念した実証研究が求められていたし、その条件、研究環境として整備されていたとすることができる。

その研究については、前半期と後半期に二分することができる。すなわち、アチック・ミュージアムの水産史研究の仕事に専念できた前半期と、渋沢栄一伝記史料編纂所への異動、兼務に契機にそれまでとは異なる研究展開を求められた後半期に分けられる。

### ①前半期：渋沢栄一伝記資料編纂所以前(昭和10~13年)

現地調査と史料にもとづく実証的研究

### ②後半期：渋沢栄一伝記資料編纂所以後(昭和13~21年)

網漁業の発展論的分類と体系化

フィールドワークを行い、現地で聞き書きや資料調査を行っていた前半期と、異動や戦争等それが様々な条件からかなわず、それまでに収集した資料や調査成果にもとづいた研究を行った後半期とに区分することができる。詳細な現地調査にもとづく実証研究と、それらにもとづく体系化の試みを結果的に順序立てて行った。このことは、おそらく偶然ではあろうが、全体として山口の水産史研究の構築と体系化に一役買ったものと考えられる。

---

## 引用文献

- 大塚久雄・松田智雄・安藤良雄・関口尚志編 1968 『資本主義の形成と発展』東京大学出版会  
日本学士院日本科学史刊行会編 1982 『明治前日本漁業技術史』新訂版 臨川書店  
日本常民文化研究所編 1957 『日本水産史』角川書店  
農商務省水産局編 1983〔1910〕『日本水産補探誌〔復刻版〕』岩崎美術社  
山口和雄 1958 『日本漁業経済史研究』北隆館  
山口和雄 1957 『日本漁業史』東京大学出版会  
山口和雄 1942 「明治二十四年前後の我國漁業」、日本常民文化研究所ノート 23『渋沢水産史研究室報告』第二輯 日本常民文化研究所  
山口和雄先生古希記念誌刊行会編 1978 『黒潮から塩の道まで 研究史的回顧』日本経営史研究所